

第55回日本語障害児教育研究会(日言研)
【東京会場】2022年8月4日(木) 14:55~16:05
国立オリンピック記念青少年総合センター
【講義動画視聴】8月10日(水)~8月31日(水)

吃音児の理解と支援の実際

金沢大学 人間社会研究域 学校教育系

小林 宏明

1

お話の概要

1. 「ことばの教室」における吃音のある児童・生徒の指導・支援の提案
2. 「ことばの教室」における吃音のある児童・生徒の指導・支援の実際
 - ① 目標の設定について
 - ② 内容の設定について
3. 事例の紹介

2

1. 「ことばの教室」における 吃音のある児童・生徒の 指導・支援の提案

3

「ことばの教室」における吃音のある児童・生徒の 指導・支援の提案

- ・ 障害による学習上または生活上の困難を克服するための教育
- ・ 自立活動の内容を参考

4

自立活動の概要: 目標

- ・ 個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。

5

自立活動の概要: 内容

- ・ 個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。

6

・健康の保持

- ・生活のリズムや生活習慣の形成
- ・病気の状態の理解と生活管理
- ・身体各部位の状態の理解と養護
- ・障害の特性の理解と生活環境の調整
- ・健康状態の維持・改善

・心理的な安定

- ・情緒の安定
- ・状況の理解と変化への対応
- ・障害による学習場又は生活上の困難を改善・克服する意欲

7

・人間関係の形成

- ・他者とのかかわりの基礎
- ・他者の意図や感情の理解
- ・自己の理解と行動の調整
- ・集団への参加の基礎

・環境の把握

- ・保有する感覚の活用
- ・感覚や認知の特性についての理解と対応
- ・感覚の補助及び代行手段の活用
- ・感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動
- ・認知や行動の手がかりとなる概念の形成

8

・身体の動き

- ・姿勢と運動・動作の基本的技能
- ・姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用
- ・日常生活に必要な基本動作
- ・身体の移動能力
- ・作業に必要な動作と円滑な遂行

・コミュニケーション

- ・コミュニケーションの基礎的能力
- ・言語の受容と表出
- ・言語の形成と活用
- ・コミュニケーション手段の選択と活用
- ・状況に応じたコミュニケーション

9

自立活動の概要: 方法

- ・自立活動の指導に当たっては、個々の障害の状態や特性及び発達程度等の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導のねらい及び指導内容を設定し、個別の指導計画を作成するものとする。その際、内容の中からそれぞれに必要とする項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的に指導内容を設定するものとする。

10

ことばの教室における吃音のある児童・生徒の指導・支援の提案: 目標

- ① 吃音による学習上、生活上の困難の軽減・緩和を図る
- ② 吃音による困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養う
- ③ 吃音のある自身との折り合いをつけ、前向きに毎日の生活を過ごせたり、将来の見通しを持てたりする

11

ことばの教室における吃音のある児童・生徒の指導・支援の提案: 内容

- ・多面的・包括的アプローチ
 - ・実態把握(アセスメント、評価)
 - ・アプローチ
 - ・環境へのアプローチ
 - ・本人へのアプローチ
 - ・保護者へのアプローチ

12

実態把握(アセスメント、評価)

- ・本人・保護者の困難やニーズ
- ・国際生活機能分類(ICF)に基づいた多面的な実態把握

13

環境へのアプローチ

- ・学級担任との連携

14

本人へのアプローチ

- ・吃音の学習
- ・吃音の心理面へのアプローチ
- ・吃音の発話面へのアプローチ
- ・作戦会議
- ・グループ活動
- ・吃音と折り合いをつける方法の探求

15

保護者へのアプローチ

- ・家庭における環境調整
- ・子どもの悩みや不安への対処法の相談
- ・保護者自身の悩みや不安への対応

16

ことばの教室における吃音のある児童・生徒の指導・支援の提案: 方法

- ・「困り感」を含めた多面的な実態把握に基づき、指導のねらい及び指導内容を設定し、個別の指導計画を作成する。その際、内容の中からそれぞれに必要とする項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的に指導内容を設定する。

17

2. 「ことばの教室」における 吃音のある児童・生徒の 指導・支援の実際

18

「ことばの教室」における吃音のある児童・生徒の指導・支援の実際 ①目標の設定について

- ① まずは、吃音による困難(困り感)の軽減・緩和を図る(ex. 環境へのアプローチ)。
- ② 吃音による困難の改善・克服に有効な情報を伝えたり、技能の習得のための練習をしたりする機会を提供すると共に、児童生徒自らが主体的に取り組めるよう、働きかけたり、見守ったり、励ましたりする。
- ③ 児童生徒が吃音のある自身と折り合いをつけたり、現在や将来を前向きに考えたりできるよう、児童生徒の吃音への悩みや将来への不安を傾聴したり受け止めたりすると共に、これらの思いに変化をもたらすような様々な働きかけを行う。

19

「ニーズ」について

- ・ 児童生徒や保護者と教師が、話し合いをしながら一緒に考えていくもの
- ・ 「どのような指導・支援のメニュー(選択肢)があるか」が示される必要
- ・ 指導・支援が進んできたら、次のステップに進むために、以前より向上・改善が見られていることの説明や、今後の吃音の改善にとって支援(合理的配慮など)の除去や変更が有効と提案

20

「吃音のある自身と折り合いをつける」には

- ・ 吃音に対するスティグマの払拭
 - ・ 「吃音は悪いこと、ダメなことではない」ことをしっかりと伝える
- ・ **吃音があっても**「うまくいった」、「なんとかなった」という成功体験を重ねる
 - ・ 環境調整がうまくいった体験も含まれる

21

「ことばの教室」における吃音のある児童・生徒の指導・支援の実際 ②内容の設定について

- ・ 「多面的・包括的アプローチ」が広く支持
- ・ 「ICFに基づいたアセスメントプログラム」
- ・ 環境へのアプローチ
- ・ 本人へのアプローチ
- ・ 保護者へのアプローチ

22

「ICFに基づいたアセスメントプログラム」における実態把握(小林, 2014)

- ・ 本人・保護者の困難やニーズ
 - ・ 毎日の生活での困り感
 - ・ 指導・支援のニーズ
 - ・ 自身の吃音に対するニーズ
 - ・ 現在の生活や将来の人生設計の展望

23

「ICFに基づいたアセスメントプログラム」における実態把握(小林, 2014)

- ・ 国際生活機能分類(ICF)に基づいた多面的な実態把握

① 活動・参加

- ・ 発話・コミュニケーションの基礎的活動
- ・ 家庭での参加
- ・ 学校での参加
- ・ その他の参加

24

「ICFに基づいたアセスメントプログラム」における実態把握(小林, 2014)

- ・国際生活機能分類(ICF)に基づいた多面的な実態把握
- ② 心身機能
 - ・発話の流暢性とリズム・速度(吃音の言語症状、早口言語症(クラタリング)の合併など)
 - ・気質と情動機能(HSC(Highly Sensitive Child)、社交不安障害の合併など)
 - ・言語・認知・運動発達(構音障害、知的障害、発達障害の合併など)

25

「ICFに基づいたアセスメントプログラム」における実態把握(小林, 2014)

- ・国際生活機能分類(ICF)に基づいた多面的な実態把握
- ③ 環境
 - ・周囲の吃音に対する対応
 - ・周囲の全般的な対応
 - ・基礎的環境整備の状況
 - ・周囲の吃音や吃音に対する合理的配慮に対する理解の状況

26

「ICFに基づいたアセスメントプログラム」における実態把握(小林, 2014)

- ・国際生活機能分類(ICF)に基づいた多面的な実態把握
- ④ 吃音に対する情緒、行動、認知
 - ・吃音に対する情動(不安、不安全感など)
 - ・吃音に対する行動(語や場面の回避など)
 - ・吃音に対する認知(羞恥心、否定的捉え、吃音の知識など)

27

「ICFに基づいたアセスメントプログラム」における実態把握(小林, 2014)

- ・国際生活機能分類(ICF)に基づいた多面的な実態把握
- ⑤ 全体的特徴
 - ・得意なこと・好きなこと
 - ・苦手なこと・嫌いなこと
 - ・自己効力感・自尊心
 - ・モラル(morale)
 - ・性格

28

サポートガイドで提案する環境整備と合理的配慮(小林, 2019)

- ① 子どもの困難の理解
 - ・吃音のある児童生徒の言語症状・心理症状を適切に理解する
 - ・児童生徒や保護者に吃音の悩み・支援のニーズを尋ねる

29

サポートガイドで提案する環境整備と合理的配慮(小林, 2019)

- ② 基本姿勢
 - ・ゆっくり・ゆったりと接する
 - ・様々な発表方法を取り入れる
 - ・流暢性だけで発話の巧拙を評価しない
 - ・必要に応じて特別な配慮(合理的配慮)を検討する
 - ・からかいに断固たる対応をする

30

サポートガイドで提案する環境整備と合理的配慮 (小林, 2019)

③ からかいへの対応

- ・「吃音のからかいを許さない」学級運営をする
- ・児童生徒の不安や困難・怒りを理解・共感する
- ・児童生徒や保護者と十分相談した上で対応を決める

31

サポートガイドで提案する環境整備と合理的配慮 (小林, 2019)

④ 特別な配慮の検討

- ・実施方法の変更
- ・評価基準の変更
- ・免除(慎重に行う必要)

32

サポートガイドで提案する環境整備と合理的配慮 (小林, 2019)

⑤ 児童生徒との関わり方

- ・児童生徒の発話をよく聞く
- ・児童生徒の発話に合わせて話す(ターンテイキング、話量)
- ・児童生徒と話す際の位置を工夫する(斜め、横、視線の高さ)
- ・吃音で言葉が出にくい時は言葉が出るまで待つ
- ・吃音の状況に応じて話しかけ方を変える(発話の負荷を調整)

33

サポートガイドで提案する環境整備と合理的配慮 (小林, 2019)

⑥ 学級運営

- ・日直や健康調べ・授業の発表の内容や方法を考慮する
- ・クラス全体で発表を聞くマナーや話し合いのルールを共有する
- ・必要に応じて吃音の説明や障害理解教育などを行う(事前に児童生徒本人や保護者の了解を得る必要がある)

34

本人へのアプローチの例

- ・吃音の学習
 - ・吃音は悪いこと・ダメなことではない(からかいは悪いこと・ダメなこと)
 - ・吃音の症状(言語症状、心理症状)
 - ・声を出して話す時の体の仕組み(呼吸器、喉頭、口腔の機能と役割)
 - ・吃音が出やすい条件(力が入る、速い発話速度、発話(吃音)への過度の意識など)
 - ・自身の吃音の特徴の把握
 - ・吃音への対処法(環境調整、心理面のアプローチ、発話面のアプローチの概要)など

35

本人へのアプローチの例

- ・吃音の心理面へのアプローチ
 - ・吃音の困難や悩み、不安の傾聴(カウンセリング的対応)
 - ・認知行動療法的アプローチ
 - ・脱感作 など

36

本人へのアプローチの例

- ・吃音の発話面へのアプローチ
 - ・流暢性形成法
 - ・吃音緩和法
 - ・統合的アプローチ など

37

本人へのアプローチの例

- ・作戦会議

38

本人へのアプローチの例

- ・グループ活動
 - ・吃音のある児童生徒同士の交流や話し合い
 - ・吃音のある青年や成人との交流や話し合い
 - ・イベントの企画・運営

39

本人へのアプローチの例

- ・吃音と折り合いをつける方法の探求
 - ・吃音のカミングアウトの支援(吃音の説明資料の作成、シミュレーションの実施など)
 - ・吃音の体験や思いの言語化(手記の作成、発表の機会の提供など)
 - ・キャリア教育(吃音のある自身の将来を考えるなど)
 - ・吃音の研究 など

40

「ことばの教室」における吃音のある児童・生徒の指導・支援の実際 ③方法の設定について

- ・吃音のある児童生徒の困難やニーズ、実態は一人ひとり異なるため、指導方法は、オーダーメイドで行う必要がある。
- ・ただし、あらかじめ用意した指導内容(引き出し)から選定するセミオーダーが現実的かもしれない。
- ・選定した内容を相互に関連付け、具体的に指導内容を設定する。

41

選定した内容の関連付けの例

- ・作戦会議
 - ・環境調整(学級担任に吃音の理解や合理的配慮を求め、発話面へのアプローチ(流暢性形成法で発話する練習をする)、心理面へのアプローチ(認知行動療法的アプローチをする)

42

選定した内容の関連付けの例

- ・吃音のカミングアウトの支援
 - ・吃音の学習(自身の吃音の特徴を把握する)、発話面へのアプローチ(吃音緩和法で発話する練習をする)、心理面へのアプローチ(脱感作で、話しやすい人から徐々に対象を広げる)

43

選定した内容の関連付けの例

- ・グループ活動
 - ・キャリア教育(吃音のある青年の体験談から、吃音のある自身の将来を考える)、心理面へのアプローチ(吃音の悩みや不安を吃音のある青年に相談する)

44

選定した内容の関連付けの例

- ・吃音の指導と他の障害の指導の同時法
 - ・発話面へのアプローチ(流暢性形成法で「ゆっくり」話す練習をする)と構音指導(正確な構音で話す練習をする)を同時に行う

45

3. 事例の紹介

46

文献

- ・文部科学省(2017a)小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説. 文部科学省.
- ・文部科学省(2017b)中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説. 文部科学省.
- ・文部科学省(2018)特別支援学校教育要領・学習指導要領解説(幼稚部・小学部・中学部). 文部科学省.
- ・小林宏明(2011)学齢期吃音に対する多面的・包括的アプローチ—わが国への適応を視野に入れて—, 特殊教育学研究, 49, 305-315.
- ・ヒーリー, E・チャールズ(著), 川合紀宗(2019)CALMS:吃音のある学齢期の子どものための評価尺度. 学苑社.
- ・Yarus, J. S., Pelczarski, K., & Quesal, R. W.(2010) Comprehensive treatment for school-age children who stutter: Treating the entire disorder. In B. Guitar & R. McCauley (Eds.), Treatment of stuttering. Established and emerging interventions. Wolters Kluwer, Lippincott Williams & Wilkins, Baltimore, Maryland, 215—244.
- ・小林宏明(2014)学齢期吃音の指導・支援 ICFに基づいたアセスメントプログラム 改訂第2版. 学苑社.
- ・小林宏明(2019)イラストでわかる子どもの吃音サポートガイド—一人ひとりのニーズに対応する環境調整と合理的配慮. 合同出版.
- ・小林宏明(2021)「吃音への思いや困難」に寄り添い進める指導, 特別支援教育の実践情報 37(5), 34-35.

47



ご清聴、ありがとうございました

ご質問・ご意見は
kobah@kitsuo-portal.jp まで

さらに詳しい情報は
<http://www.kitsuo-portal.jp/>

吃音ポータルサイト | 検索

48